

ひとりひとりの自己表記を受け止めて

- 強度行動障害はつくられる -

風の子そだち園・園長 松村 昌子

この講演は、2002年11月13日、当法人の松村昌子が社会福祉法人「なのはなの会」の招きにより、利用者のご家族を対象に仙台青年文化センターで行ったものです。

表現について、一部現在では使用しないもの又は言い換えられているものがありますが、歴史的見地から当時のまま掲載しています。ご了承下さい。

. 障害理解と支援の視点を築く

- 保育園での出発（1960年代後半）

30数年前、風の子保育園で保育をしていた頃を振り返りますと、「言葉というのは自然に出てくるもの」「遊びも自然に遊ぶもの」なんだと思っていました。できないこと、分からないことは教えてあげたり工夫すればいいのではないかとそのときに本人が頑張る、努力というのも大事なんではないかと、そんな風に簡単に考えていたんですね。ですから言葉の出ない子は保育園に入れてあげればいいんじゃないかと非常に簡単に考えていました。言葉の遅い子どもさんを持ったご家庭の方もそんな風に思って保育園を訪ねてこられますし、児童相談所の方も「いっぺん保育園を訪ねてみてはいかがですか、集団に入れてみては」とおっしゃるので、訪ねてこられる方が増えていったんですね。

それまでも遅れたお子さんはいたのですが、私が保育をしていた1960年頃、そういう子どもさんが増えてきたように感じます。その中にとっても遅れた子どもさんがいました。クラスを見ていたのがとても良い先生で、30人を一人で受け持ち言葉の遅れた子どもと一緒に保育していたのですが、その子どもが変わってくるんですね。言葉の言えなかった子どもなんですけど、いつも上がっている鯉のぼりがなくなっているのを見て「コイボボリ、ナイ」と一生懸命職員に知らせているのを聞いて、私も感激したのをおぼえています。

で、丁寧に見てあげたらいいんじゃないかということになったんですが、ほかの職員から、こんな子は保育所に入れる子ではないんじゃないかという抗議があがってきました。「よその公立保育所ではみんな断っていますよ、この子たちは他にいくところがあるのと違いますか」ということで私たちは児童相談所に判定に行ってもらいました。確かに鯉のぼりがないと言った子は言葉が十分出でなかった子ですが、それ以外にも集団の中で非常に難しい子ども何人がいたんですね。判定結果は軽度でしたが、「この人たちは行くところがあるんでしょうか」と相談所に尋ねたら、「難しいですね」という話だったんです。じゃどうしたらいいんだろうということで、園の中で勉強が始まりました。

- 手探りの障害児保育（1970年代前半）

その時に私たちの知っていた大学の先生から、「保育というのは、4歳や5歳の子どもでも3歳や2歳と考えると、丁寧に見たらいい」という話を聞きました。

農家で三重苦の障害をもつ子どもが柱にくくり付けて育てられていたのを、東京大学の梅津先生が研究して育てた二十年間の記録を「人間開発」という映画にしたものがあるんですね。それを見せていただいて、子どもは自然に言葉が理解できるようになるものではないんだなということとか、重さとか長さとか空気とかをどういう風に教えたら良いんだろうとかが、この人間開発の中に出てくるんですね。保育の世界ではお話や紙芝居をするのが言語の領域だったんですが、「保育って科学なんだ。ちゃんと勉強しないで私たち素人が保育の資格を持っていたら保育ができるってということではないんだな」って、私たちは大変ショックを受けたんですね。

クラス担当に一人の助手をつけて、一人ひとりに丁寧についてあげる保育をしたいということで、その当時大阪市が始めたばかりの開拓的実験事業の助成金の申請をしました。申請が認められて、健全児の集団の中で助手がついて保育をする助成金がつきました。ここで対象になる障害のある子どもを募集したところ、たくさん応募してこられたんですね。正直なところどの人が重くてどの人が重くないのか、私たちは分かりませんでした。「どの子ども丁寧にしたら変わるんや」と思って、地理的に近い人とか、お母さんが熱心に頼まれた人などを何人が受け入れました。

研究報告を出さなければなりませんので、大学の教育原理の先生と心理の先生と助手の先生と3人で週1回ずつ来て下さることになり、この子たちをどう理解したらよいのかと討議が始まりました。ところが自閉的な子どもたちばかりだったものですから、常同行動とかいらだちとかいろいろもっていたり、「聞こえているかな」「見えているかな」と思うくらい人に無関心の子もいまして、正直なところ大学の先生たちもお手上げでした。職員もですね、ちゃんと保育しなきゃと思うと手を引っ張ってきてみんなと同じ事をさせようとしたりそんな無理をさせてはいけないと言われればその子の後ろについて歩いたりとどうしてよいか分からない状態が出てきたわけです。私たちもああでもないこうでもない、自閉的な子は生き物は嫌いなそうだとか、手探りでやってみました。

（続く、全17頁）

以下の目次

- ・難しい行動の意味を読み解く
- ・向き合う姿勢を省みる